

Patient First

Vol. 3

間質性肺炎治療の最前線に立つ先生とMRの想いをお伝えします。

早期に診断し、 治療を開始すること。 それが、IPF患者さんに提供できる 最大のベネフィットです。

はるひ呼吸器病院 院長
齊藤雄二先生

1990年福井医科大学(現・福井大学)卒。福井医科大学第三内科呼吸器グループに入局。福井医科大学救急部助手を経て、1998年藤田保健衛生大学呼吸器内科講師。米国Mayo Clinic Scottsdaleにて間質性肺炎を研究。2007年藤田保健衛生大学呼吸器内科准教授。2012年医療法人清須呼吸器疾患研究会 豊和病院院長、2016年はるひ呼吸器病院院長に就任。



間質性肺炎は
診断・治療が
極めて難しい疾患

んなどと比べ間質性肺炎についてきちんと治療できる医師はまだまだ少ない。「治らないから様子を見るしかない」「悪くならもう仕方がない」とさじを投げた状態です。

間質性肺炎をはじめとする呼吸器疾患の患者さんに適切な診断と治療を提供していきたい。そう考え、仲間とともにクリニックを立ち上げましたが、そこで在宅から慢性期、急性期まで一貫した方針の下で24時間対応の治療を提供していくことの必要性を痛感し、専門病院の立ち上げへと至りました。根底にあるのは、自分たちが診ている大切な患者さんを、最後まで診てあげたいという思いです。

石田 こちらの病院における、間質性肺炎の患者さんの状況はどのようなもののでしょうか。



はるひ呼吸器病院

藤花 齊藤先生が間質性肺炎をご専門にされた経緯についてまず、お聞かせいただけますか。

齊藤先生 医師になって最初の10年は気管支喘息の患者さんを中心に診てきました。契機となったのは、藤田保健衛生大学に移ってから。喘息の患者さんに混じって、間質性肺炎の患者さんが数人、立て続けに入院されたことがあったのです。診断にはCT画像を撮って、肺生検をして調べるわけですが、なかなか間質性肺炎と特定できない。病理診断の専門医に聞いても1年間も返事が来ないので。ならば自分で調べるしかない、米国のMayo Clinic Scottsdaleに赴き、間質性肺炎の病理診断の権威であるColby先生に教えを乞いました。そこが出発点ですね。

藤花 間質性肺炎の病理診断について学ばれたことが、大きなきっかけなのですね。

齊藤先生 間質性肺炎の診断をめぐる状況は、実は今もあまり変わっていません。まず、間質性肺炎を専門とする病理医の先生自体が日本にはほとんどいない。また、呼吸器専門医でも、肺が

NBI
オンコロジー事業部
西日本営業部
東海ディストリクト
藤花 憂さん

NBI
オンコロジー事業部
西日本営業部
東海ディストリクト所長
石田 剛さん





症例研究会で 実臨床に役立つ 知識を

齊藤先生 現在診ている患者さんは約140人。そのうち特発性肺線維症 (IPF) の患者さんは約半分です。愛知県内はもとより、奈良や三重からも患者さんが来院されます。

疾患の診断は、末梢血T細胞のTh1/Th2バランスの検査や肺活量の精密測定、HRCT画像診断などで総合的に判断します。間質性肺炎で間違いないとなったら、入院していただき気管支肺泡洗浄 (BAL) や気管支鏡による肺生検 (TBLB) を行い、線維性かどうかを確認。その上で、80歳以下であればご本人の意向を聞いて胸腔鏡下の肺生検 (VATS) を行います。

藤花 IPFの治療ガイドラインでは診断の確定には集学的検討 (MDD: multi-disciplinary discussion) が必要とされていますが、先生はどうされていますか。

齊藤先生 MDDは、呼吸器内科医・画像診断医・病理診断医の3者による検討が重要視されていますが、現実的にそうしたMDDができるケースはほとんどないと言っていいでしょう。当院では、幸い画像診断医・病理診断医との連携を持っているため、数年前より遠隔地の先生方とインターネットを活用したMDDを行っています。さらに一歩進んだ取り組みとして、院内のサーバーに症例データを取り込み、遠隔地からでも共有・検討できるシステムを11月に構築しました。音声通話やチャット機

能も備えており、リアルタイムのコミュニケーションを取りながら意見交換が可能です。地域の先生方に無償で解放し、MDD実施のネットワークづくりを進めていきたいと考えています。

藤花 このシステムが本格稼動すれば、IPF診断の促進に弾みがつきますね。

日々、MR活動をしていて、多くの先生方が間質性肺炎やIPFの診断や治療をどう進めていけばよいか困っていらっしゃると思います。はるひ呼吸器病院へのご紹介をおすすめしても構いませんか？

齊藤先生 全く問題ありません。ぜひお願いします。

藤花 ありがとうございます！患者さんの適切な診断・治療につながればと思います。今後、先生が間質性肺炎、IPFの治療で実現していきたい夢をお聞かせください。

齊藤先生 IPF治療で取れる選択肢は限られており、万能薬はありません。私が重視しているのは、治療の前提となる正確かつ早期の確定診断の実現です。何の病気であるかを早く見極めることができれば、そのぶん適切な治療を早く開始でき、進行を遅らせたり留めたりするチャンスが広がるからです。一人でも多くの患者さんにそうした機会を提供していきたいと考えています。

石田 その実現のために、MRや製薬企業がお手伝いできることはありますか？

齊藤先生 間質性肺炎の専門医以外の先生に対する疾患啓発を拡げていくことを期待します。大規模な講演会で教科書的な説明を受けるよりは、症例研究会や院内講演会のような少人数での学ぶ機会を設けるほうが有効でしょう。その際、特異な事例ではなく、「普通の症例」を取り上げ、実臨床に役立つ知識を身につけていただくことで、間質性肺炎やIPF、その治療に対する理解が深まるのではないのでしょうか。

藤花 間質性肺炎の診断と治療の促進のために、私もMRとしてできることを考え、実行していきたいと思います。本日はありがとうございました。

対話を終えて

齊藤先生が何よりも患者さんを優先し、大切にされている事を実感致しました。このお考えは、正にNBIオンコロジーのPatient Firstに通ずるものがあり、適切なより多くのIPF患者さんに、オフェブを届ける事の重要性を改めて考えさせられました。今以上に、「この患者さんに、最善の提案か？」と自分に関わって、日々の情報提供活動に活かしていけたらと思います。(藤花さん)

